

孕ませ鬼の急所を潰す  
女たちの恐怖の対抗策



玉子王子著

## 一章 孕ませ鬼って？

都内某所。

電車。

ガタンゴトンと揺れながら走る。

人は多いが、立っている人間はいないぐらいの込み具合。

カタン、とスマホが床に落ちる。

慌てて拾うのは学生服の少女。

顔を赤らめつつ、画面を見る。

——壊れてないよねえ……

ニュースサイト。

〇〇ビルで孕ませ鬼出現。被害者女性二〇人以上。

「二〇人！」

思わず叫び、周囲の男女の目を集める。

顔を赤らめてうつむく少女。うつむきつつ、スマホを再び見る。

——二〇人も……信じられない。



駅で電車が止まる。

ブシュ、と音を立てて扉が開く。

「珠、おはよう」

眼鏡の少女。スマホの少女が微笑みかける。

「舞花、このニュース聴いた？」

「え？ ……なにこれ？」

横に座る眼鏡の少女舞花が、珠のスマホを見る。

「孕ませ……鬼？」

「え？ 知らない？ 最近話題だよ、病気なの」

「病気？」

「宇宙からウイルスかも、って話で……感染すると男の人だけ、病気になるみたい」

「じゃあ私ら関係ないんだ」

「いや、女のほうが困るの」



声を潜める珠。

「病気が発症すると、頭おかしくなっちゃってさ、女の人襲うのよ」

「えー？ それ病気のせい？ 元からクソ野郎なんじゃない？ 潰しやいいのよそんな野郎は」

「え？ 何を？」

「なにをって……そりゃ、うふ」

周りを見回す舞花。周囲は割と女が多い。六割以上か。それでも、二割以上は男がいる。

というか、眼鏡の舞花の横はOL風の女性だが、珠の向こうはサラリーマン風の若い男だ。それと、ふと目が合う。ニコ、とほほ笑む舞花。

「うふふ、そりゃ……クソレイパーの体の一部を潰すとしたらもちろん……おキンキンでしょうよ」

サラリーマンが思わず膝を締める。それを見て、またニンマリする舞花。

——うふふ、やっぱりおキンキン潰しの話は、男なら他人事じゃないから気になるというか、関係なくても不安になっちゃうんだ。わからないわー、ついてない私には。

「えー、そんな……ぷぷ、潰すなんてかわいそうだよ」



「レイパーよレイパー。潰したってナノメカの薬で治るんだから、五、六回潰しやいいのよ、キ○タマなんて」

小声。小さく嘖き出す舞花。

珠もつい嘔き出す。長椅子に並んで座っているので、横に男がいることは横目ですぐわかる。

ちらっと見て、あっと少し驚く。が、すぐににんまりする珠。

——あは、この人ちょっと膝締めてない？　っていうか、その向こうの人も。タマタマ不安なんだ？　弱点なんだよね、おキンキンは。どのくらい弱いのかなあ？　潰れても治るんだから別にそんなに守る必要ない気も……いや、まあ痛いから守りたいんだろうね。知らんけど。

手足が吹っ飛んでもすぐ再生できるナノメカ入りの薬がコンビニで買える世界である、睾丸などは秒で治せる。そのため睾丸を持たない女たちは「治るんだからそこそこの理由があれば金的は問題なく許される」と考える場合が多かった。

珠たちの話は小声ながら、近くには聞こえる。

男たちはなんとなく顔を赤らめて膝を締め、女たちはクスクスと思わず笑ってしまう。

「まあレイパーならね」

「金潰し当然っしょ」

「っていうか痴漢レベルでも……再生可能である以上、金潰し当然だよな」

「っていうか昨日の帰りの電車でやられたから、金ちゃん膝蹴りで……あぐう、とか面白い反応して倒れたんで許してあげた。足開かせてキンキン踏み潰してね。うふふ、泡吹いて白目剥いたからナノ薬飲ませて放り出して帰ったわ」

「許してもらえてラッキーじゃんその痴漢」

「だよな一、性犯罪やっというて、許されたんだから」

珠たちの正面のOL二人。朝の出勤時間なので学生や勤め人がほとんどだ。

この車両の人々もいろいろな話をしていたが、女たちの話題は珠たちが口にした「性犯罪には金的」ネタがかっさう。一方、周囲で自分も持っている絶対急所への攻撃が取りざたされるのを否応な聞かされる男たちは急所を引き締めて黙っているしかない。

——なんだこの女ども、治るからって痴漢ぐらいで玉踏み潰しだと？　でも、治るんだし、警察に突き出されるよりましなのか……いや、玉踏み潰しだぞ？

珠の横のサラリーマンが悩む。

——痴漢で逮捕なんて人生終了だ。それに比べて、潰れて治らないならまだしも、治るのだから玉潰しで済ませてもらえるならありがたい話だろうってのが、クソマ○コどもの考え……それは理屈としてわかる。でも、所詮は**金無し劣等種族**の考えだ、わかってない。治るとはいえ、玉が潰れるという事の絶望と、性の相手のはずの女にそれをやられることで感じる、男としての全否定のような屈辱を。そして何より……金的の痛み！　自分じゃデコピンも思いきり玉に打てないっていても、歴代の彼女誰も笑って信じねえ。でも、本当なんだ。玉無しクソマ○コにはわからねーだろうが……

別に痴漢をする予定などはないが、つい考えてしまう。

隣に座っている珠と違って、他人ごとではないから。

足をさらに閉じて座る。

その足の間でしっかり守らねばならない、急所の肉玉を。

金的談義を巻き起こしつつも、珠たちは初めの話に戻る。

「それはそれとして、舞花、マジで知らないの？　孕ませ鬼」

「エロゲーのタイトル？」

「最近世界中で出てきてる病気だって。なんていうのかな、宇宙から来たんじゃないかって噂のウイルスでさ。あ、コレさっき言った？　で、生きるのに、どうも男性ホルモンが一定以上濃くないとだめなんだって」

「へー、じゃあ男の人と、珠もヤバいじゃん」

「なんでよ？」

「見た目はオッパイも大きいし女らしいけど、中身オッサンだも。タ〇キンぶら下げてそうっていうか」

「ぶら下げてねーっての！」

パン、とスカートの前を叩く。見ていた男たちがびくりとする。

それに気づき、ぷっと噴き出す珠。

——あらあら……金ちゃん？ 自分なら金ちゃんが大ダメージだって、想像してビビっちゃった？ 今でもダメージ受けちゃうんだ？ 私は全然平気だけど。マンマンつよつよ、タマタマザコザコ。うふふ、ついてたら今みたいな行動も怖くてできないとしたら……ついてない側でよかったわ。

「ほら、ついてないでしょ？」

「わかんないな一、我慢してんのかも」

「えー、まあ、その可能性はあるかもね。ぶっちゃけ、盛り過ぎだと思うし。玉弱いよー、って言い張ることで、女の子に遠慮してもらってタマタマを守ろうという深慮遠謀ゴールド防御。あっ」

横に手を伸ばし、珠の股間を手で覆う舞花。

「ほら一、隠してるならさっさといわないと、握り潰しちゃうよー」

「握るもんないでしょが。そっちこそギュー」

「いやん」

手を伸ばし返されても、まるで足を閉じようとしないう舞花。女子として大股開きで座っているわけもないが、かといってきっちり閉じて守るべきものもない。

「っていうか、あんた股間に手を伸ばされても全然閉じないね」

「そりゃね、羞恥的な意味はあれど、女だからね。物理的には、別にここって攻撃から守る必要ないし」

「だよね、ここに握り潰されるモンとかついてないし」

「っていうか、握り潰されちゃう部分とか構造的にヤバいでしょ。体の中に入れて守らないでいいのかな？」

「いろいろ作るのに出しとかなきゃらしいよ。って、知ってんでしょ」

「あは、そりゃね。男の子が子孫繁栄のために頑張ってくれてるおかげで、いざってとき女の子は…弱点狙えて逆転勝ちも可能になるわけだ。ありがたいわ」

乗り合わせた男たちは皆、足の間になんとなく不安を感じてくる。

女たちは全く他人事、上から見下ろす気分で心なしか普段より足を開いて座っていた。

「っていうか話し進まないけどさ、ほら、あれ」

「孕ませ鬼ね。病気で、頭おかしくなるって？」

「そうそう。ウイルスで、男性ホルモンが一定以上ないと生存できないらしくって。女が感染してもすぐウイルスは死滅するけど、男の人だとホルモンが強い部分に集まって……」

「ん？ どこ？ シンボルくん？」

「惜しい、ボールの方らしいよ。ボールくんが男性ホルモン出してるから……」

「なるほど」

実際睾丸の男性ホルモンが高いのかどうかよく知らないが、この世界では睾丸が最も男性ホルモン濃度が高い部分である。

「タマタマボールの中でウイルスがある程度増えると、一気に頭をやられて……レ○ブ魔になるんだって」

「じゃ、ウイルス退治だ」

「それがそうもいかないのよ。アメリカとかじゃ、初期のころ、普通のレ○ブ魔とみて制圧に鉄砲で撃ったらしいんだけど」

「ちょ、制圧で**大人のおはじき**とか、アメリカはやっぱ頭やベーわ。テザー銃とかいう電気の奴でよくね？」

「人数多いからそうなったみたいだけど……撃ったら、撃ったほうもダメージ受けたのよ。超能力で」

「超能力って」

「脳が何か突然変異するみたいで、こう、近くにいる人たちと「衝撃の共有」をやるんだって。銃で腹を撃たれた孕ませ鬼は死んだみたいだけど、周りにいた警官や女の人たちもみんな、お腹に銃で撃たれたぐらいの衝撃受けて、死傷者が大勢出たとか」

「……そういえば、そんな変な話聞いたことあるわ。テレビでやってたけど、やっぱテレビなんてクソだと思ってすぐ忘れちゃって」

「マジらしいのよ。だから孕ませ鬼が現れると、捕まえるのが難しくて、大人しくなるまで待つことになるんだけど、その間にそこにいた女の人たちはみんなひどい目に」

「やだ、キモいよ。っていうか、周りの男の人は止めてくれないの？」

「それが、超能力でね……孕ませ鬼が発症すると、周りの男の人たちも同じ状態になるらしいの。それに加えて、ウイルスもブワッと口から出てさ、まわりに広がりまくって、感染した男の人も急速に症状進むとか……その人が発症すると、また周りに広げてって……」

いきなりわけのわからない話をする珠。

かなり半信半疑、同じことをテレビで聞いても信じない舞花だ。

眼鏡の位置を戻しつつ、ふと珠の横のサラリーマンを見る。

「うううう」

涎を垂らし、歯を剥く。しつつ、股間を押さえる。

「え？」

——まさか、電車の振動でタマタマにダメージ？ いや、なわけないわよね。それじゃ歩けねって、玉弱すぎて！

ふざけたことを考えているうちに、立ち上がるサラリーマン。

獣のような咆哮を挙げる。

挙げるや、周りの男たちも同じように股間を押さえ、うめき、そして立ち上がる。

「え」

真っ青になる珠。

一人が妙な行動を取る。そして周りの男たちも同じように動く。

その行動パターンから、なにを思い浮かべるか。

今、自分で話していたことしか、思いようがない。

隣の男が、孕ませ鬼を発症したのだ。

そしてそれが超能力だかなんだかで、周りの男たちにも伝播した。

ガタンゴトンと、電車が揺れる。次の駅まで、一〇分。

逃げ場のない密室だ。

体験版終わり

続きは製品版でぜひお楽しみください